

補説第三 渋沢関連企業と大震災

― 帝国ホテル、渋沢倉庫、田園都市 ―

渋沢栄一が創業や経営に関与した幾多の企業へ、関東大震災は種々様々な影響を及ぼしたと推察されるが、とくに記録された特色ある三例をここに提示する。すなわち、堅固な建造によって激震にも耐え、近隣からの延焼を防衛した帝国ホテル、地域一帯の大火に襲われ、主要施設のすべてを焼尽した渋沢倉庫、敷地と構造の周回な選定により震火災を免れ、さらなる発展へと進んだ田園都市がそれらである。

一、帝国ホテルの防衛

帝国ホテルは明治二十三年（一八九〇年）麹町区内山下町（のちの内幸町）、鹿鳴館の隣地に建造された。富国強兵と殖産興業を国是とする明治政府は、一等国への発展を目指し、急速な欧化政策を採った。そのため各国から貿易商や政府要人の来日が増し、国際的な社交場たる鹿鳴館が脚光を浴びるとともに、賓客に相応しい宿泊施設が必要となる。やがて伊藤博文内閣の外相井上馨の所望によって、渋沢栄一と大倉喜八郎を发起人として株

式会社帝国ホテルの設立が準備された。営業開始より一年後、同社の事業報告には創立の経緯も記載される。①

「帝国ホテル会社第一回報告」

本社ハ明治廿三年十一月三日ヲ以テ開業シ、自來業務漸次緒ニ就キ、ココニ本年上半季ヲ経過シタルニ因リ、乃チ第一回報告ヲ裁シ、株主各位ノ閱覽ニ供ス

創立之事

本社ノ創立ハ、明治廿年ノ初メ當時ノ外務大臣井上伯爵ハ本邦ノ首府ニシテ外来賓客ノ需ニ応スヘキ壮大ノ客館ナキハ国際上欠典ナリトノ意見ヲ以テ、現在ノ株主諸氏ニ謀リ、諸氏其拳ヲ賛成シテ創立ノコトヲ決定シ、發起人總代式名、則渋沢栄一・大倉喜八郎ノ両氏ヲ選挙シテ創立ノ事務ヲ委任シタリ、而シテ外務省用地麹町区内山下町一丁目一番地ノ内四千式百一坪六勺ヲ同年八月ヨリ五十ヶ年ヲ限り無地代借用ノ允准ヲ得、尋テ地質ヲ査シ其可ナルヲ認メ建築ノ計画ニ着手セシモノナリ

建築之事

本社建築ノ設計ハ学理ト実用トヲ斟酌シテ定メタル者ニシテ、其受負ハ日本土木会社ニ委托シ、其地盤ノ築立ハ明治廿年七月二起工シ二十一年十一月二竣リ、一切建築ハ廿三年十一月二至テ落成セリ、建坪ハ本館

帝国ホテルの設計はドイツ人チーテエ・メンツに依嘱して明治二二年に開始され、新鋭の建築家渡辺謙に引き継がれて、三年後木骨煉瓦造りの建築が完成した。ルネサンス風本館の一階はパブリックスペースが中心をなし、食堂のほか、舞踊室、奏楽室、談話室、喫煙室、撞球室、新聞閲覧室を備えたとされる。開業時の理事長渋沢栄一は明治四二年古稀を迎えて諸事業から引退し、帝国ホテル取締役会長をも辞任した。後任の会長に大倉喜八郎が、支配人には国際的な視野豊かな林愛作が就任する。やがて本館の老朽化に伴って隣接する新館建設の構想に着手され、設計者としてアメリカの著名な建築家フランク・ロイド・ライトの招請が大正五年に実現した。以後敷地の確保と建設予算に係わるをめぐる支障や、処遇への不満と思われるライトの離脱によって工事が大幅に遅れるとともに、創業時からの本館自体が大正十一年失火により全焼した。これら相継ぐ困難のなかで経営陣の刷新によって建設への努力が続けられ、鉄筋・煉瓦構造の地上五階地下一階の帝国ホテル新館がやがて竣工する。日比谷公園に面し、独自の造形美に輝くいわゆるライト館に、来賓五百名を招いて披露宴が予定されたのは、奇しくも一九二三年九月一日であった。② 中国、イギリス、アメリカでホテル勤務を修業して五年前副支配人として迎えられ、この年支配人の重責に就いたばかりの犬丸徹三は、自伝『ホテルと共に七十年』において震火災

① 『渋沢栄一伝記資料』第十四巻、三八二―三八四頁。

② 『帝国ホテル百年の歩み』五一―七、一六一―一七、一二―二三、二九、三二頁。

からの防衛を委細に回顧する。

犬丸徹三「運命の九月一日」その一

起工から七年、幾多の難関に遭遇しつつ、紆余屈曲を経て、ここに帝国ホテル新館は漸く完成、帝都の中心部にクリーム色の軽快斬新な全貌を現わし、東京市民を瞠目させた。

内部の飾りつけも終って、大正十二年九月一日を期して、はなやかに落成開館の披露宴を催すこととなった。当時は未だ現今の如きパーティーをおこなう習慣がなかった。朝野の名士およそ五百名を昼食に招待して、盛大な祝宴を張り、続いて演芸場で余興を公開するという順序とし、私はこの日、早朝からその準備に忙殺されていた。私としては帝国ホテルに入社して、ここに五年を過ごし、副支配人及び支配人として、新築工事に関係してきただけに、全館落成には心中無量の感慨と喜びを禁ずることができなかった。

正午少し前、準備をまったく完了して、いまは来賓の到着を待つばかりとなった。私は紋付きの羽織袴に白足袋という礼装に威儀を正した後、念のため、それぞれの係の責任者を支配人室に集めて、各部門とも方遣漏のないことを確かめ、なお二、三の指示をおこなった。これが終ると、各員は支配人室を去って、それぞれ館内所定の部署に就き、室内には私のほか庶務係二人のみが残った。

突如、かの大地震が襲来したのは、まさにその時である。

私としては、この日支配人として初めて際会した晴れの舞台であり、そこへ図らずも歴史的な大惨事が突発したのであるから、これについての記憶は、いまなお鮮烈なものがある。私はその時の経緯を、ここに

能うる限り詳細に記述しておきたいと思う。

時計の針はちょうど十一時五十八分を指していた。私は何か異様な鈍い地鳴りの如き物音を耳にしたと思つた途端、足もとから突き上げてくる激動を全身に感じた。激しい地震である。大地が大揺れに揺れ、建物は突き上げられ、突き上げられ、前後左右に揺れる。

「地震だ」「危ない。気つけろ」「これは大きい」と私たち三人は、思わず口々に叫びながら、壁に両手を支えて辛うじて起立していた。

最初の震動が終ると、私はまっしぐらに料理場へ馳せつけた。それはまったく無意識の行動であつたが、その時、私の脳裡には、料理場には常に火があるのだという考えが潜在的にひらめいたのだと思う。ところが料理場は、料理人たちが全員逃げ出したらしく、人影一つ見当たらない。そして一隅には電気炉があかあかと燃え、その上に油を入れた大鍋が乗せられたまま放置してある。しかも、その周囲の床上には油滴が点々とこぼれて、それが盛んに小さな火焰を上げているではないか。

危ない。鍋に火が入ったならば、爆発を起こして万事休すのである。私はただちに床上の火焰を踏み消すとともに、大声を發して、「誰かいないか」と叫んだ。すると彼方の調理台の下から三人の菓子職人が、このこはい出してきた。私は彼らに鍋の処理を命ずるとともに、壁間の電気スイッチに飛びついた。料理場全体の電気を消そうとしたのであるが、そも如何なる原因か、スイッチを切っても電流が切れない。炉は依然あかあかと燃え続けているのである。

いまは一刻の猶予も許さるべきでない。私は咄嗟の考えで変電室に走り、電気技師に「メイン・スイッチを切れ」と命じた。しかしメイン・スイッチを切れば、当然全館が消灯される。私としては大英断であつた。やがて（向側）東電の方角から火の粉が風に乗って飛来し始めた。私はそれが新館の屋内に入るのを防ぐため窓のシャッターをすべて閉鎖させた。すでに消灯してある上に、シャッターを閉じたので、館内は手探りしなければ歩行不可能なほどの暗黒状態を呈したが、そのなかで二階に宿泊中の米園ユニバーサル映画社社員某氏の八、九歳になる女兒が行方不明になった。母親はスイッチを切るから、こんなことになるのだと、ヒステリックな声を張り上げて、われわれを叱責する。余震がしきりに襲来するなかで文字通り、全館を上から下へ暗中模索するうち、やがてその女兒が無事な姿で発見されて、私は安堵の胸をなで下したのであつた。〔中略〕

晩夏のこととて窓々には布製の日除けが取りつけてあつたが、やがてこれに火の粉が舞い落ち、点々とくすぶり、炎を上げ始める。私は従業員を督励して館の内外を走りまわり、火をたたき消し、日除けを外さなければならなかつた。火の粉は屋上にも無数に落下する。破損したガラス窓からは容赦なく黒煙が入る。しかし、水が出ないため消火は思うに任せない。たたき消し、踏み消すだけである。〔中略〕これに呼応して誰彼が競つて屋根によじ登りシーツを裂いて紐とし、これにバケツを吊して、汲みおきの水を入れ、リレー式に運んで、屋上に振りかかる火の粉を消すことに努力した結果、これはひとまず終熄した。

すると今度は北側の道一筋を隔てた愛国生命保険のビルディングが、窓から黒煙を噴き始めた。飛び火が入つたものようである。これは現在の日生ビルの位置にあつた。従業員はすでにこぞって避難したらしく、

屋内には人影一つすら見出すことができない。もし建物が炎上すれば、ホテルもかならずや類焼の厄に遭うにちがいない。一難は去って、また一難が迫り来たったのである。

私は愛国生命ビルを指して「あの窓を閉める。なかの火を消せ」と叫んだ。するとたちまち何人かがビルへ走って火を消し、窓を閉じて帰って来たので、われわれは思わず歓呼の声を発し、いっせいに拍手した。かかるうちに四辺の建物には滾々たる黒煙と紅蓮の炎が挙がり、帝都は一面凄惨なる火の海と化した。強風次第に吹きつって、愛国生命ビルはふたたび飛び火を受け、危殆に瀕したので、宿泊客全員の協力を得て水運び、しきりに窓に打ちかけたところ、これが功を奏して、この建物は炎上することなく、その形を全うし得たのである。表玄関から電車通りへ出てみると、日比谷公園は大八車を曳き、ふろしきを背負って続々避難する群衆で溢れんばかりの状態であった。①

地震国日本を考慮したライトの設計では高層の建造は回避され、新館玄関前には美観と防火のため大きな蓮池が造られる。また、施設の動力源として石炭を用いず、照明、暖房、浴室などすべてに電力を使用した。また、とりわけ料理場の設計と造営については欧米での研鑽を経た犬丸の重要な責務とされた。右の証言のとおり、彼の防衛活動はまず炊事場における消火と変電室での電源遮断に始まったのである。②

① 犬丸徹三著『ホテルと共に七十年』展望社、一九六四年。一四三―一五一頁。

② 同書。一三六―一三八頁。

堅固な構造によって帝国ホテル新館は大地震の衝撃に耐え、従業員全員が近隣からの類焼を必死に防衛する。とはいえ、日比谷公園を隔てた彼方では前会長の大倉喜八郎の邸宅が焼失し、大倉集古館に蔵される貴重な美術品も灰燼に帰した。さらに犬丸の震災記録は同ホテルによる避難民および被災企業への支援へと続く。

犬丸徹三「運命の九月一日」その二

落成会館披露の当日、しかも祝宴開始の直前にかかる大災禍が発生するとは、いかなるめぐり合わせといふべきであろうか。すべては天なるかな、命なるかなである。しかし祝宴開始中この地震が起こっていたならば、来賓の誘導にも大混雑を来たしたであろう。それを考えれば、時刻の早かったことは、まだしもよかったといひ得る。もちろんこの惨事の突発で披露は自然中止となった。

しかしこの災厄は期せずして新館の建築の優秀性を天下に実証する結果をもたらした。この建物は継ぎ目が随所であり、地震に遭った時、全体がたわむように造られており、また重心が極度に低いところにおかれている。私は日本古来の建築である五重塔、三重塔の類が地震や暴風によく耐えるという点で、その構造にこのホテル新館と軌を一にする要素があることに、大きな興味を抱かずにはいられない。事実この時の大地震に際して、浅草寺、谷中天王寺、上野東照宮など東京市内の各五重塔は、たわみ揺れながらも木造建築の真価を十二分に發揮して、遂に倒壊することがなかったが、煉瓦造りの浅草十二階凌雲閣は、第一震によってもろくも中央部から折れ崩れた。私は最初の激動のなかにあつて、新館の建築については何の不安も抱かなかった。それはさらに続いた数十回の余震にもよく堪えたのである。ライト氏の設計はこの建物の強固な

る耐震性を充分実証してくれた。〔中略〕

私は自己の独自の判断で宿泊客のすべてに対し、宿泊料を無料とすることを思い立ち、ただちにこれを断行した。また外部から飯の宿を求めて避難してきた人々に対しても同様の取り扱いをおこなったが、食事は料理場使用不可能のため、シチューの如ききわめて簡単なものを提供し、同時に付近の建物から焼け出された人々には炊き出しをおこなって、握り飯を提供し、非常な感謝を受けた。

9月朔日の夜は一睡もとることなく、従業員を指揮して防火活動に努力した。四方に起こった火災は、紅蓮炎々と天を焦がして凄惨きわまりなく、しかも余震が時々襲来する。人心の不安動揺を懸念した政府は即刻、非常徴発令及び戒厳令を公布した。

明けて二日を迎えたが、火勢は依然猛烈で内幸町一帯でも、多くの建物が順次焼け落ちて行く。午前五時過ぎであった。睡眠不足の身体で新館の表玄関に出て、西南の方を眺めると、眼前の日比谷公園の森の彼方、赤坂葵町の米国大使館から大倉男爵邸とおぼしきあたりへかけて、盛んに黒煙が上っているではないか。

さては大倉邸も罹災か、と私が取るものも取りあえず、葵町へ馳せつけると、憂慮したことが的中して大きな男爵邸はすでに全焼しており、これに隣接する大倉集古館もまた、倉庫を残すのみで、同様鳥有に帰っていた。大倉集古館は、大正四年男爵を授けられた大倉喜八郎氏が、その感激を社会一般に対する奉仕で表現したいと念じて、同六年八月に設立したものである。

私は集古館の前庭へ飛びこむや、そこに大倉男爵が浴衣一枚の姿に、手ぬぐいで頬かぶりして、冷飯草履を突っかけたまま佇立し、ひとり凝然と集古館の残骸に視線を向けておられるのを見た。早速、お見舞いの言葉を述べると、「ホテルはどうか」とたずねられるので、私は「ホテルは幸い焼け残りました。ここにお

出でなくても仕方がありません。ホテルへお出でになりませんか」とお勧めし、男爵のお供をしてホテルへ帰った。

朝飯を差し上げると、大倉男爵はこういわれた。「私は家が焼けて、七千万円くらいは失ったかね。しかし、それはいつかは取り返すことができる。惜しいのは集古館にあった美術品が焼失したことだ。これは金銭に換えられない。実に惜しいことをしたよ。」「〔中略〕

わが帝国ホテルは、旧館がほとんど倒壊したものの、新館はわずかに熾熱により数枚のガラスを破損したのみで、他には震火災による瑕瑾を一つだに負わず、満目荒涼たる焦土の帝都に巍然たる姿を見せて聳え立っていた。私は新館が罹災を免れたのは実に大いなる幸運というべきであると思い、このさいこの建物を最も有意義に活用したいと考えた。

そこで種々想を練った結果、あず社屋焼失の難に遭い、取材活動も意に任せぬ東京朝日新聞、電報通信その他の新聞通信各社にロビーの一隅や客室を提供することとした。次に英、仏、米、伊などの各国駐日大使館にも、同様に客室を事務所として提供し、さらに王子製紙、東京電灯、大倉組、日本土木、大倉商事、高田商会などの罹災各社にも、ホテル内に仮本社を設置せしめたが、これらの措置はまことに適切であるとして感謝された。

それと同時に食糧の確保が喫緊の要事であると考え、ただちに自動車を東京府西部の八王子方面に派遣して、野菜を買い集めさせた。これは当然現金仕入れをおこなったのであるが、しかも食糧は前述した如く、宿泊客、避難者に無料で提供したため、ホテルの会計はたちまち現金払底という事態を招来するに至った。

〔中略〕止むを得ず、窮余の一策を案じ、私は外務省に奔った。あたかも山本権兵衛内閣が成立した直後で、

外務大臣は山本首相の兼任であった。外務省では大臣秘書官谷正之、情報部長小村欣一の諸氏が私の顔を見るや、しきりに慰安の言葉をかけてくる。私が小村氏に借金を申し込んだところ、同氏は即座にこれを快諾した。ただし帝国ホテルが外務省から借り入れることはできないので、小村氏自身が外務省から一時融通を受けるという形式を取り、ただちに会計課へその手続きをおこなってくれた。①

創業のときより帝国ホテルの発展を二十年間主導した洪沢栄一は、明治三四年会長の職を辞し、以後相談役として企画や経営について助言し、新館建設に際しても用地の確保と資金の調達に尽力した。震災ののち常務取締役を経て、第二次大戦後取締役社長に就任する犬丸は、とくに薫陶を受けた人物として、入社時の会長大倉喜八郎および震災時の相談役浅野総一郎とともに洪沢の面影について語っている。とくに感銘を受けた彼の談話は手国ホテル設立の意義に関するものであった。

犬丸徹三「慈父の如き好々爺」

私が洪沢子の知遇を受けるに至ったのは、社会事業に奮闘しておられたころであった。私は青年時代の子爵については、まったく知るところがない。晩年の子爵は大倉翁とは肌合いが異なり、一見好々爺たる紳士で、すべてによく気がつき、常に懇切なる態度を持された。帝国ホテルへ来館されると、従業員に対しても

① 同書。一四八一―一四九、一五一―一五六頁。

機会あるごとに、諄々として慈父の如き教訓を垂れられたものである。その一言一句はいまも私の耳朶にはつきり刻み込まれている。

洪沢子は、私が大正八年一月ホテルへ入社したころは、すでに役員を退官されていた。私は大正十一年「旅館経営と重要法規の研究」なる一書を著した。これについてはすでに触れたところであるが、この小著を子爵に呈与して、まことにていねいなる礼状に接したことがある。さらに大正十三年秋、私が大塚常吉君と共編の形で「ホテル経営」なる一書を刊行したことも前述した通りであるが、この時私は旧著「旅館経営と重要法規の研究」の前例にない、その一本を洪沢子爵に呈したところ、子爵は一日ホテルへ来館して、私に対しその礼を述べられた後、さらに「君が現代科学を体得して、その立場からホテルの経営と管理を深く研究しているのは、まことに結構なことである」と冒頭して、大要次の如き一場の談話を試みられた。

「第一次伊藤内閣に外務大臣を勤めた井上馨侯は、条約改正に成功するため、まず欧米諸国人と日本人との対等の交際を主張されたところ、逆に外人から、対等の交際をおこなうには、まず生活様式を同一化するところが第一の条件ではあるまいかとの反問を受けたという。すなわち彼我の日常座臥は全然異なつた様式で営まれている。外人は日本人の如く畳の上に直接身体を横たえて就寝することは不可能であり、また男女混浴の習慣も存在しない。従って日本人が欧米の生活様式を、そのまま実行し得るに至ることが先決であるとの論理である。井上外相はまさにその言の如くであるとし、わが国に純洋式の大ホテルを建設して、日本人といえども先進諸国民と生活様式を同じうし得る可能性を持つことを明示すべきであるとの結論に到達して、これをぜひとも民間の力で実現するよう、われわれに慫慂しんようされた。かくして実業界の発起により帝国ホテルが創立されたのである。かかる趣旨の下に開業したのであるから、帝国ホテルは民間の経営とはいう

ものの、なかば国家の事業たるべき性質を備えている。その支配人たるもの、この点を忘れることなく、今後一層励努されたい。」

以上のごとき渋沢子爵の談話は、いまなお銘深いものがある。帝国ホテルは有限会社として出発し、その後株式会社組織を改めたのであるが、単なる一営利事業としてではなく、常にあくまで公共優先の立場を経営の上に固く貫くべきであるとの、私の考え方は入社以来四十余年を経過した現在も、まったく変わっていない。①

① 同書。一八三一―一八五頁。

二、渋沢倉庫の焼尽

一八七六年（明治九年）渋沢栄一は日本橋兜町の自邸を事務所転用し、深川の住吉町に転居した。この邸宅は清水建設の創立者清水喜助の設計により、永住の目的をもって相当の規模をもって建築された。階段親柱を飾るべき唐獅子は豪華に過ぎるとして、渋沢が配置を拒否したと伝えられる。①

深川福住町邸は明治十年十月名工清水喜助の造る所にして檜及黒柿の良材を用ひ天井は神代杉孔雀目の一枚板および赤桐の一枚板なり。欄干の葡萄及柿の彫物は名工堀田瑞松の刀にして当代の傑作と称す。庭は一面の池にして海より海水を引き燈籠木石凡ならず風景愛す可し。徳川前征夷大將軍慶喜臨眺殊復奇の五字を書し賜う。之を木刻の額面に造り楼楯ろうたてに掲けり ②

やがて渋沢邸に寄宿する青年の研鑽のため、そこに交流の組織龍門社が設けられ、のちには会誌の刊行、講演会の企画等へと発展する。その敷地には先住者から継承した土蔵が相当にあつて、親族が経営する廻米商店等に

① 白石喜太郎著『渋沢栄一 九二年の生涯』国書刊行会、二〇二一年。夏の巻、二四六―二四七頁。

② 『青淵先生六十年史―一名近世実業発達史』龍門社、一九〇〇年。第二巻、九一二頁。

貸与されていた。一八九七年渋沢は二四歳の長男篤二に実業の修業を積ませるべく、この施設を利用して渋沢は倉庫会社を設立したのである。

今渋沢倉庫の起源を按ずるに深川福住町邸内には巨多の倉庫あり 先生之を他に貸付せり 先生一夕子弟を集め人間処世の心得方拝・経済運用の途に付て語る談偶々倉庫の事に及ぶ 先生座中を顧みて曰く此の倉庫を以て倉庫業を営むも以て役員労働者数十人の口を糊し尚相当の利益を挙ぐるに足るへしと 依て又長男篤二を顧みて曰く汝尚幼少なりと雖も乃父の志を継ぐの考あらは試みに座中の子弟と共に其経営の方案を立て来れ 予れ汝に資を給し其業務に従事せしむへすと是れ渋沢倉庫の初なり ①

商品の保管と運輸を引き受ける倉庫業は、金融業や製造業とともに資本主義の発展に不可欠な企業である。金融界の指導者であった渋沢は、つとに明治十年倉庫業建設の建白書を政府に提出していた。当時の取締役、のちの参与利倉久吉は著書『渋沢倉庫株式会社三十年史』で企業被災の様相を簡潔に記述する。のちに役員を務める利倉久吉は著書『渋沢倉庫株式会社三十年史』において同社開業の経緯と初年次の営業について参照する。

当会社の前身なる渋沢倉庫部は明治三十年三月三十日を以て深川区福住町五番地に営業を開始す。

① 同書。三一三―三一四頁。

営業主渋沢栄一、倉庫部長渋沢篤二、支配人布施藤平なり、倉庫の所在地は渋沢家の外郭にて全面は道路を隔てて西大島川の河岸に面す。同所は元米問屋近江屋喜左衛門の宅跡なりし故に同河岸は近江屋河岸と称したり。〔中略〕

第一回営業報告書（明治三十年自三月三十日至六月三十日）唯一部のみ幸に罹災を免かれ網町邸に現存せしを以て其概要を左に摘記す。

倉庫部第一回（三ヶ月間）報告書概要

	入庫個数	出庫個数	期末残高個数
米	二八九、八八九	一五六、四五一	一三三、四三八
雑穀	二三、三五一	一八、二六七	五、〇八四
雑貨	三、四九八	一、五八二	一、九一六

雑貨品目は綿糸布、麻糸布、洋紙、セメント、皮革、書籍等にしてその頃は火災保険を取扱はず故に金額は不明なり、

当時の深川在米六八六、五二五俵、同雑穀一八五、一一五俵

同期間中の寄託者総数は六十一名なり

①

① 利倉久吉著『渋沢倉庫株式会社三十年史』渋沢倉庫株式会社、一九三二年。三一五、二三四―二三六頁。

やがて深川の沿岸には物流企業、すなわち洪沢倉庫、三井倉庫、東京倉庫、安田倉庫、等々が林立する。なかでも洪沢倉庫株式会社は洪沢家が直轄する重要な会社であつて、全国各地に物流機関が設け、主として米穀など保管および輸送を業務とした。大地震の時期には第一銀行頭取の佐々木勇之助が同社の会長を兼務し、栄一の孫洪沢敬三や娘婿の明石照男が取締役、秘書の増田正純も監査役に列し、株式の大半は洪沢家と第一銀行で二分されていた。① 当時の取締役、のちの参与利倉久吉は著書『洪沢倉庫株式会社三十年史』で企業被災の様相を簡潔に記述する。兜町から隅田川と永代橋を隔てた深川では、富岡八幡宮の近く門前仲町から出火し、食糧供給の基点である東京廻米市場が潰滅する。洪沢倉庫焼尽の様相と被災への対応は、利倉による前述の社史で簡潔に伝えられる。

「九月一日の大震災災」〔『洪沢倉庫株式会社三十年史』〕

大正十二年九月一日昼十一時五十八分突如東京及近県に亘り起りたる大地震は実に未曾有の惨状を惹起したり。当倉庫として震災の被害は驚くべき程度に非ざりしも、其夜各所より起りたる火災のため東京市内は山の手方面の一部を除き下町は丸の内一帯を残して全部焼失し、当倉庫に於いても深川の鉄筋コンクリート倉庫平屋建六百三十五坪と外に借庫八十坪を除き深川本店、南茅場町、霊岸島町南出張所四千余坪外に借庫二千余坪共類焼し保管貨物金額約八百万円を烏有に帰せしめたり。他の同業倉庫も住友のコンクリート五

① 同書、二三四―二三六頁。

階建を除き全部焦土に化したり。取りあえず丸の内大川事務所の一部を借受け九月四日より本店仮事務所を開き各焼跡に其旨揭示す。

之により自宅焼失退き中の従業員も十日迄に仮事務所に殆んど出揃ひたり、なお引続き連日多少の震動止まざれば人心は極度の不安に襲はれ思想は險惡に化し、すべての交通機関の破壊に伴ひ物資は欠乏を告げ、恰も戦場無警察の状態になれば随所に掠奪行はれ、鮮人焼打ちの噂に鮮人を殺害する者を生じ、直ちに戒嚴令を布かるるに至る。又経済界には二ヶ月間の支払猶予令を發布せらる。為めに各銀行は預金に対しても一日一日百円以上の支払に応ぜざりし。又水道、電燈の破壊に井戸の無き場所は夏季の飲料水に苦しむと同時に燈火の欠乏に苦しむたり。又貨物、乗用の自動車は政府の徴発する処となりガソリン油の管理に移りたり。地震の当初より地震には火災の伴ひ易く、従つて地震の際生じたる火災の損害に対しては、火災保険者はその損害賠償に応ぜざるべきは既定の事実なるにも拘はらず、筆者（利倉久吉）は初震当日かくの如き大火災を惹起せむとは夢想にも思い起し能はざりし処にして、単に普通警戒の外火災に対する非常準備に思ひ及ばざりしは今更内心慚愧の至りに堪へざる次第にして、かかる巨火に対し水道は第一に破壊し消防ポンプ類の多くは破損して長時の使用に耐えず、其他如何なる準備も無効に終るべきは必然ながら、尚且最善の注意無からざりしものありしが如く大に遺憾とする処なり。

安政時代往古の事なれば兎も角今開明の世の中に於て人畜の死傷幾十万に達すると言ふが如き、実に不解の現象にして蓋し尚人力の尽さざる処多かりしが如し。不取敢従業員全部に対し其月分の月俸前渡しを行ひ、後に震災見舞金として各月俸一ヶ月分、尚自宅焼失者に対して別に火災見舞金として各一ヶ月分を給与せり。

此火災のため半数以上の金庫を焼失して重要書類、諸帳簿類、証券用紙、印判等を失ひしも日常取引に要する帳簿及書類は幸に罹災せざりしを以て金銭並に保管貨物に関する障害を米さざりしは不幸中の幸にして、同時に約百坪のコンクリート倉庫と在庫品安全なりしたため市場に物資欠乏の折柄百数十万円の貨物の内日常必需品割合多かりしには、一部寄託者の満足を買ふに止まらざりしが如し。また焼失せし本店印判及倉荷証券用紙は第一銀行大阪支店に依頼して該地に於て調製し、其他の書類用紙諸帳簿は門司支店に於て調製急速の補充を得たり。

又小樽門司の両支店支配人等は新聞の号外に驚愕するのみにて其後の事情判明せず、依て不取敢両支店支配人は途中の困難を排して出京し各応援に努めたり。①

なお、これら物流産業が依拠する東京廻米市場は、一八八六年米一の従兄渋沢喜作等の尽力により開設された。同市場の沿革と渋沢家の係わりについては、日本銀行編の調査報告に簡潔で明快な記述が見出される。米騒動と関東大震災に際して食糧確保に向けて渋沢栄一が發揮した機敏な指示は、同家の多年にわたる精励の賜物である。

① 利倉久吉著『渋沢倉庫株式会社三十年史』渋沢倉庫株式会社、一九三二年。一五五―一五八、二三四―二三六頁。

深川市場と其組織

徳川氏江戸を相して幕府を開きし以来江戸市街の發達著しく享保年間既に諸侯家臣幕府の旗本御家人其他市民を加へて在住の人口約百五十万を計上せり云ふ、されは当時既に年四、五百万俵の米を消費し居たるや疑をいれず、之が供給は関東地廻米の外、遠国の廻米を以て充當したるもの如し、「中略」当時供給米を掌る商人には「御蔵米」を取扱ふ「札差」即ち一旦淺草の米蔵、本所横網の倉庫へ納めたる幕府の廻米を旗本御家人へ給与するもの、「遠地廻米」即ち当時「納屋米」と称するを「下り米問屋」及び地廻米を取扱ふ「脇店」の三者ありたり。「中略」明治に至りても米納を金納に改むる迄は尚ほ此組織を存したり然るに金納以来状況全く一変して各藩の御蔵米をも前記特殊機関以外の純然たる商人の手により販買ひざるを得ざるに至り、多額の移出をなす米産地に於ては一時非常に困難したり、殊に仙台藩の如きは前述の如く往時より他藩と異り大阪江戸への廻送は藩の事業として全部藩の手によりて移出し、私人の米迄も商人の取扱を許さざりしかは、今此革新に遭ひ地方商人と東京商人との連絡を欠き一時移出中止の姿となりたり、当路の官人痛くここに苦心し渋沢栄一、同喜作の両氏に謀りたるに其任に當る事となり、全国の米の荷受方廻送方を引受け、先ず仙台米の廻送に着手し三菱組の汽船にて東京に廻送し深川における各藩の蔵所に積入れたるかここに始めて遠隔の地方と東京間に實際の商業的取引を聞くに至れり。

然るに一方市中に於ける米取引は未だ雜然たるものありき、即ち地廻米を取扱ふ脇店を別とし旧下り米問屋の或る者及、小野組等小網町川岸に於て営業を継続したりしか當時兜町に不用地ありしを持ってここに米商を集合しやや市場の如きものを作りしも其効果少かりき。越えて明治十七年政府は東京都知事に命し市中玄

米問屋業の統一を図らんとし深川に米穀取引所を設け一方廻米の荷受と市中販買を営みたる前記渋沢喜作氏
其他三井、久住、奥、中村の五氏に依頼するに米取引整理の事を以てす、ここに於て五氏は今の廻米問屋組
合を組織し明治十九年十二月深川佐賀町に公開の正米市場を設け之を東京廻米問屋市場と称したるか爾來米
の供給は此廻米問屋と神田川、亀島、本所堅川等の脇店のみにて取扱ふこととなれり。①

〔未完〕

① 日本銀行調査局編『東京深川市場ニ於ケル正米取引ニ関スル調査』日本銀行、一九一九年。十一―十二頁。